

ジェノヴァ旧軍用施設再生計画

大規模な軍用施設跡地を利用した、治水事業と市民公園整備事業

【キーワード】

〔施設種別〕 高齢者施設 障がい者施設 こども施設 住宅（住宅型ホテル） 地区の家、他
 〔運営主体〕 市区町村 法人 NPO 個人 社会的協同組合
 〔建物形式〕 1棟単体型 複数棟集合型 団地型 集落
 〔建物状況〕 新築 増築 改修 一部改修 既存
 〔対象者〕 高齢者 障がい者 子ども ファミリー 多世代 移民



写真1 海岸側からみた、切り立つ斜面地に張り付く高層密集住宅群

ラガッチョ地区周辺には、地形に沿って斜面地に張り付くように高層密集住宅が建ち並ぶ。これらは戦後に建築された建物である。基本的に民間分譲又は賃貸物件で、公営住宅はない。主に高齢者でなくファミリー世帯が住んでいる。

視察月日 11月8日

記録担当者 西野辰哉, 斎尾直子

案内者 ロベルト・バルカータ氏（ジェノヴァ市治水担当責任者）
 アレッサンドロ・モーラ氏（同市治水対策エンジニア）
 多木陽介氏（通訳）



写真2 今回で説明頂いた市の担当者

左：ジェノヴァ市治水担当責任者 ロベルト・バルカータ氏，右：同エンジニア アレッサンドロ・モーラ氏

1. ラガッチョ地区の特性

ラガッチョ Lagaccio 地区の人口は1万2千人で、同北東のオレジーナ Oregina 地区も同規模である。両地区の南側には海岸線が迫っており、旧港地区のある海岸から切り立つ斜面地に集合住宅がびっしり張り付く、地形的に特徴のあるエリアである。これらの地区の高層密集住宅街は戦後にできたもので、民間分譲又は賃貸物件である。また、この地域には公営住宅はなく、高齢化率も比較的 low、こうした集合住宅には主にファミリー世帯

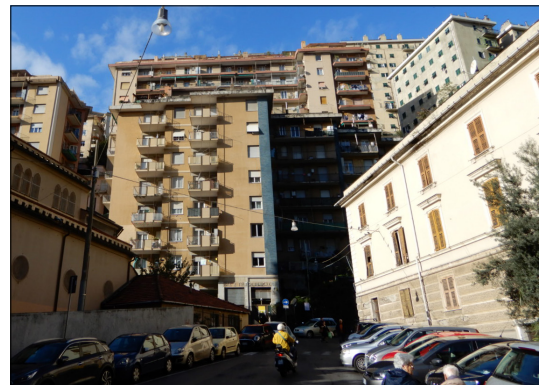
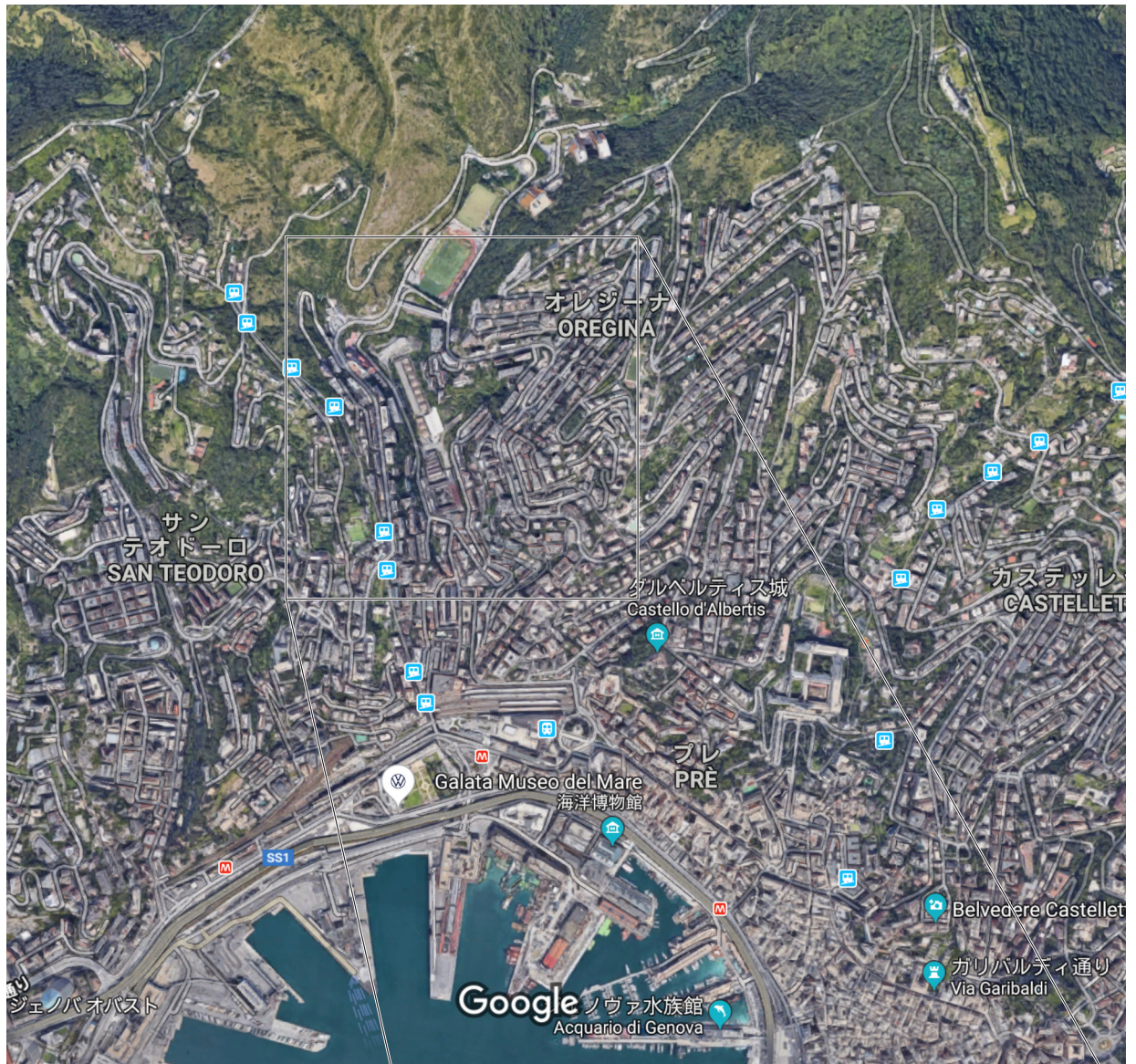


写真2. 敷地周辺（南）

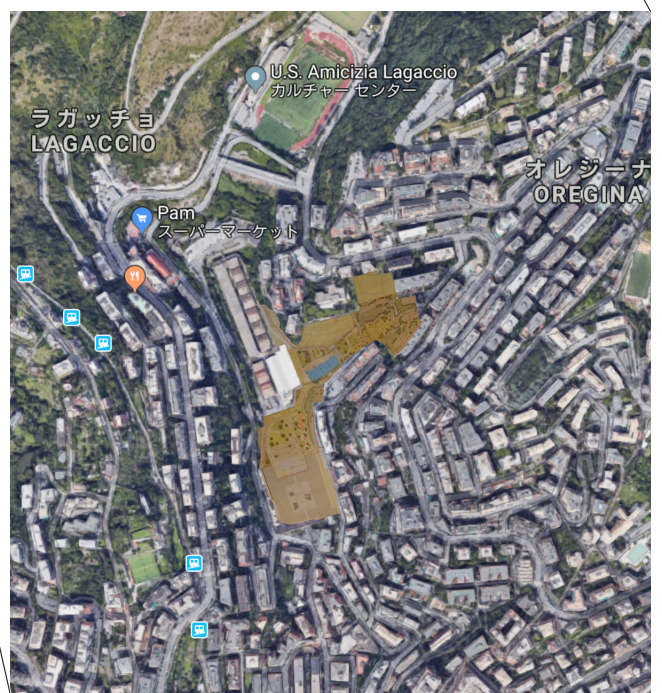


画像 ©2019 CNES / Airbus、Landsat / Copernicus、Maxar Technologies、地図

写真4 (上) ジェノヴァ市におけるラガッチョ地区の位置

ジェノヴァ・プリンチペ駅から北に斜面を上がっていくところにある。斜面が急なため生活用ケーブルカーもある。旧軍用地の上流には17世紀に皇太子が水遊びのために作った貯水用人工池があったため、この地区にはラガッチョという地区名がついた。

写真5 (右) 公園完成図を地図にコラージュしたもの
対象敷地は右図の通り。敷地南端の中庭型の旧軍用建物は保存する。その奥の建物などを解体して公園とするが、現在でも軍が使用している工場(白い屋根、およびのこぎり屋根の建物)などは敷地外で触れない。これらの間の地下に山側から水路が通っている。



が多く住んでいる（写真2～4）。

戦後すぐのスプロール的な開発の中で、これらの地域には駐車場はなく、道路は狭く、公園もない。「最低一家に一台車を置けるように」という制度ができたのは、この地域の開発が進んだ後の1960年代である。現在でも、建物以外に住民が使える場所は狭い道しかない。

この地域で段階的に使用が停止された旧軍用施設を活用した再生計画として、治水対策と公園整備が行われ、入口の建物を「地区の家」として活用することとなった（→p.118）（写真6）。この整備に伴い、数十年ぶりにこの地区に小さな子ども達が遊べる広場ができた、という状況である。本来、この地域は駐車場整備の要望があってもおかしくない状況であるが、それよりも「こどもが遊ぶ公園を作ってほしい」というのが住民の要望であった。他の地域に比べて低所得ではあるが、地区全体のことを考える人々であるとのことである。

2. 旧軍用施設の跡地

当該敷地は1642年から軍用地としての供用が始まり、砲弾を製作する軍事工場として使われていた。元々の敷地は、全体で約5万平米ある。イタリアでは2004年に徴兵制度が廃止されるなど、軍の合理化のための一連の改革が進んでおり、軍事施設の集約再編も行われている。関連してこれ以降、軍事施設跡地の民間活用が多数発生しており、この施設も20年以上空き施設であった場所の再生事例である。1998年法により、国有のままでは改修費用がまかなえないため、国有地を地方公共団体に無償または有償で譲渡できるようになり、その制度を活用している。

当該敷地は6,7年前にジェノヴァ市に無償譲渡され、全体を市民公園にする計画である。その条件が、「歴史的な外観をできるだけ残し、社会的用途に使うこと」であった。再生計画では、治水対策エリア（北西側）と公園整備エリア（東、南東側）に大きく分かれている（写真7～9）。現在も軍が使用している建物が敷地内にあるが、これらは再生計画エリアからは外れている（写真10）。なお、今回の調査時点では、治水対策エリアは既存建物の解体から始める、という段階であった。再生計画の概



写真6 敷地周辺（北東）

松の後ろにあるのが小学校。運動場のある小学校はほとんどない。真正面の建物1階（グレー部分）に幼稚園がある。入口の向こう側に幼稚園がもう一つある。

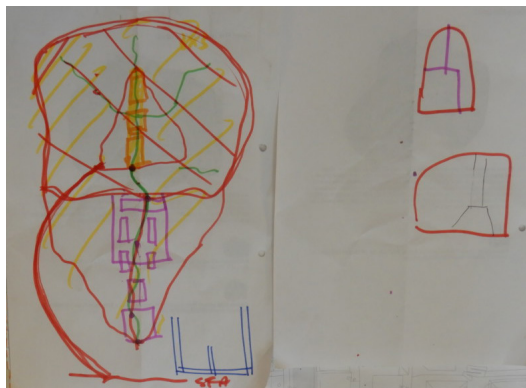


写真7 治水対策の概念図

左は地区全体の治水対策のイメージ。山や敷地北側のグラウンド（黄色に塗られた部分、US AMICIZIA LAGACCIO など）から地下を通る水路（緑色）が軍の建物の間をまっすぐ通り抜けて敷地（ピンク色）の地下を通って南側の海に流れている。今回は敷地内の水路の更新がメイン工事となる。右はその敷地地下水路の断面イメージ。水路内に建物基礎柱があるため、水流が阻害されている。水路は大凡3m×3m。なお、左図で大雨時の増水対策として敷地北側のグラウンドから海へとつながる水路（赤色）を敷地から100m西側に敷設する予定であるが、これは別予算。



写真8 エリア分け図

オレンジは国から無償譲渡されたエリア、赤はEUの資金も入って整備するエリア、白（主に法面）は必要に応じて私有地を買い上げたエリア。

要は市の治水対策担当者からお話をうかがった。

3. 治水対策

旧軍用地の上流には、17世紀に皇太子の水遊びのため貯水用人工池があった。これを由来として、この地区にはラーゴ（Lago・湖）→ラガッチョ（Lagaccio）という地区名がついたという。現在も敷地地下には17世紀当時の水路が流れており、それが壊れないように整備する治水工事をおこなう。



写真9 公園整備計画図

公園エリアはかなり広いため、5つのパートに分けられている。1つ約1万平米ある。その全体をいろいろな要素をもった市民公園にする計画である。

この敷地は、谷筋で山からの水みちになっている。敷地後背部の山の斜面は、かつてはブドウの段々畑であり、人の手がはいた里山だったが、近代にはいと放置状態となり、降雨時の治水管理が難しくなっている（写真11）。さらに、近年の気候変動の影響により、ジェノヴァ市においても集中豪雨と洪水がしょっちゅう起きるようになった。山側で降った雨水が街まで大量に流れ込まないようにするため、地下16mにトンネルを掘り水を流す（水位2mくらいになる）。古い地下トンネルは細いため、これは壊して、大きいトンネルに作り変える。現在は、公園になるエリアのみで工事が予定されている。米軍の流量規準（エクラス）で計算したが、実際の効果は不明である。

4. 市民公園整備

公園整備については、敷地がかなり広いため、5つのパートに分けている（写真8）。各約1万平米。国から無償譲渡されたエリア、EUの資金を入れて整備するエリア、必要に応じて私有地を買い上げたエリア等がある。公園の具体的な計画として、例えば、治水プロジェクトの一部として灌漑等の特別な技術、歴史的な方法等を見せるエリアもある。地形を生かして完全バリアフリーの公園を作るのが目標である。実際は高低差がかなりあるため、車椅子で登れるように工夫したいが、難しい部分もある（写真12）。

ジェノヴァ市では地下を掘り返す際、必ず考古学者と共同で作業しなければならない。何か埋蔵物が出てくると作業は止まる。この敷地も、かつて全面的に軍事施設であった時には調査をおこなうことができなかったが、市の所有になったので手を加えられるようになった。南側の、保存する中庭型建物から入って正面のRCとレンガの建物は解体する予定である（写真13）。解体すると3,500 m³ほどの瓦礫が出ると試算されている。床面舗装は、調査の結果、歴史的価値があると認められたため、保存する予定である。また、地質調査については、砲弾が地面に埋まっている可能性があり非常に難しい。来週から調査開始予定である。

治水担当部局の仕事は既存建物の取壊しと地下トンネ



写真10 敷地北側の現行軍用施設

もともとの敷地内には現在でも海軍が使用している工場があり、これらには再生計画では触れられない。これらの間の地下に山側からの水路が通っており、再生計画の敷地地下にそのまま流れている。建物の間の奥に小さく見えるのがイタリア赤十字の建物で、その白壁のあたりまで、かつての人工池の水位があった。



写真11 敷地奥の山の斜面

山頂の建物あたりにかつてジェノヴァを囲む城壁があり、その内側法面は侵入した敵が隠られないように全ての木が取り払われていた。



写真12 取り壊し予定の建物と敷地東側をみる

かなり勾配があるため、完全なバリアフリーは難しい。



写真 13 保存建物（左）と解体建物（右）
左が中庭のある（地区の家が入っている）保存建物。右が解体予定の建物。正面に敷設された舗装は歴史的価値が認められるため保存指定。



写真 14 敷地内から西側周辺をみる
手前に保存する軍用工場。奥に高密度な集合住宅が迫る。



写真 15 敷地内から東側周辺をみる
敷地とのレベル差が大きく、擁壁が一部くずれている状態。

ルの完成である。公園全体の完成年度や工期は、様々な要因により流動的である。しかし、一部補助金を得ている EU ルールでは 2 年で完成という条件があり、残り約 1 年となった。既に施工会社は決まっている。この事業については、Unilove(ウナラブ) という EU 補助金 (HORIZEN2020 の一部) で総額 120 万ユーロ (約 1.5 億円) に加えて、ジェノヴァ市が資金拠出をしている。

敷地の全体像について、その他の情報と全貌を写真 14 ~ 16 に示す。中長期的には手を入れる必要がある擁壁や複数の保存予定の建物など、地形的条件としても敷地全体の利活用としてもこれから時間をかけて手が入っていく事例である。

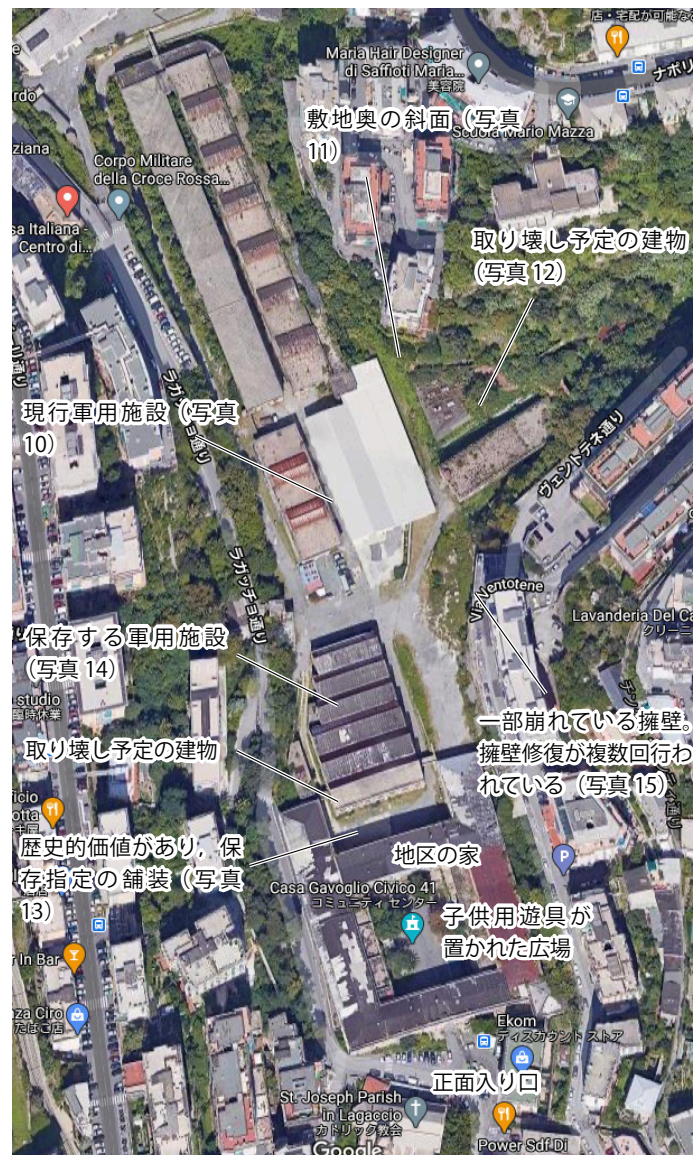


写真 16 建物の保存と取り壊しの予定